



【典礼部だより】ミサ曲について②～「栄光の賛歌（グロリア）」～

四旬節が始まって早々になんですが、まあミサ曲についての第2回ですので、順番通り「栄光の賛歌（グロリア）」の話題です。「栄光の賛歌は、きわめて古いとうとぶべき賛歌であって、聖霊のうちに集う教会は、この歌をもって神なる父と小羊をたたえ、祈るのである」（『ローマ・ミサ典礼書の総則』53）と言われるように、この賛歌は初代教会の朝の祈りとして成立した古いものです。

ローマ帝国による迫害が止んだ4世紀ごろ、ミサに取り入れられ、そのときは教皇様だけが歌う賛歌でしたが、5～6世紀には全ての司教が待降節と四旬節以外の主日ミサに歌うようになり、会衆がみんなで歌うようになったのは11世紀の終わりごろだといえます。

その後、16世紀から19世紀初めには多くの作曲家がミサ曲を作ったこともあり、この賛歌も楽器演奏に重きを置いた長いものに変っていきました。一時期は会衆が「演奏」を黙って聴くものになってしまったのですが、20世紀初めの教皇・聖ピウス10世が、教会音楽は聖歌（声による祈り）が中心であって、奏楽が祈りや黙想の妨げになってはならないことを示し、今の形になってきたのです。

この賛歌は「天には神に栄光、地にはみ心にかなう人に平和」とご降誕を告げる天使た

ちのことば（ルカ2・14）で始まり、続いて「神なる主、天の王、全能の父なる神よ」と呼びかけ「わたしたちは主をほめ、主をたたえ、主を拝み、主をあがめ、主の大いなる栄光のゆえに感謝をささげます」と、これからミサで行うことを高らかに宣言しています。この賛歌が開祭で歌われる理由の1つでしょう。

父なる神に続いて、わたしたちは「主なる御ひとり子イエス・キリストよ、神なる主、神の小羊、父のみ子よ」と呼びかけ「世の罪を取り除く主よ、いつくしみをわたしたちに」「世の罪を取り除く主よ、わたしたちの願いを聞き入れてください」「父の右に座しておられる主よ、いつくしみをわたしたちに」と3回祈願します。「いつくしみをわたしたちに」が「いつくしみの賛歌（キリエ）」と、「世の罪を取り除く主よ、いつくしみをわたしたちに」が「平和の賛歌（アニヌス・デイ）」とつながっていることにご注目いただければ幸いです。

そして、わたしたちはまた「ただひとり聖なるかた、すべてを越える唯一の主、イエス・キリストよ、聖霊とともに父なる神の栄光のうちに」とイエス様に呼びかけ、三位一体の神秘を賛美し、「アーメン（ヘブライ語で「その通りです」の意味）」と賛歌を結ぶのです。

【四旬節黙想会のお知らせ】

2月28日～3月1日、四旬節黙想会が開催されます。指導司祭はイエズス会司祭、上智大学文学部教授の川村信三神父様です。主なスケジュールは右の通りです。

- 2月28日（土）18:30～ミサ。
 - 3月1日（日）09:30～ミサ。
- ミサの後、黙想会講話。
昼食休憩後、ゆるしの秘跡（～14:30ころ）。

【広報部より】イエズス・マリアの聖心会の新体制について

2月10日から13日の4日間にわたって、イエズス・マリアの聖心会インドネシア管区日本地区の集会在、友部修道院で開かれました。

総長アルベルト神父様と管区長パンクラス神父様の臨席のもと、新指導部として地区長に千原神父様、副地区長にルスニ神父様、地区顧問にワルヨ神父様を選出されました。任期は3年です。

また、15日には、パンクラス神父様が水戸教会にお越しになり、日本語ミサおよび英語ミサを司式してくださいました。

みこころかい しんたいせい



水戸教会でルスニ神父様ともにミサを司式するパンクラス神父様（左）

日本での宣教司牧継続のための新体制となりますが、これからもイエズス・マリアの聖心会のさらなるご発展のためにお祈りいたします。

広報部/〇〇〇〇



聖フランシスコに呼びかけたサン・ダミアノ教会の十字架

【2026年】聖フランシスコ年の祈りについて

アジジの聖フランシスコ没後800年である「聖フランシスコ年」にあたり、教皇レオ14世がこの1月にフランシスコ会家族総長に宛てた手紙の中のお祈りが公開されています。

カトリックさいたま教区の公式サイトからは、日本語と英語でプリントできるPDFデータがダウンロードできます。右のQRコードで表示されるページの「ひらがな」という部分をクリックしてご利用ください。

